

アルピニスト・野口さんが講話

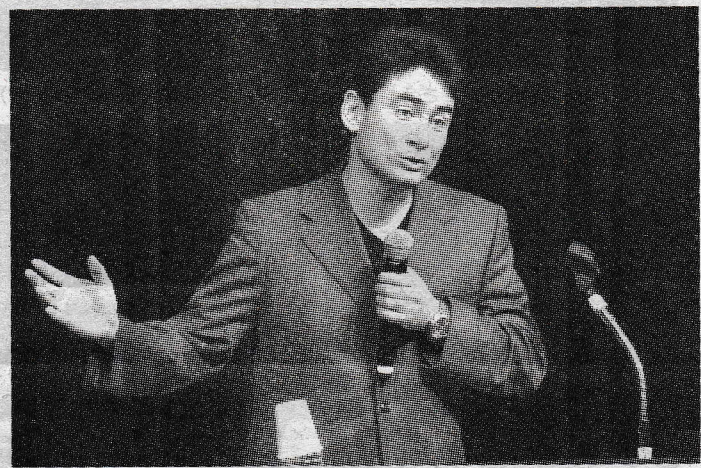
「富士山を守る、意識で活動の継続を」

清掃活動の体験から警鐘

富士地域労働者福祉協会の主催で、2013年度「福祉とくらしのセミナー」が26日、ロゼンアター中ホールで開かれた。アルピニストの野口健さんが「富士山から日本を変える」と題し、自身の登山経験を交えながら、エベレストや富士山での清掃活動を始めたきっかけ、今後の課題などについて講話。出席した会員や市民が熱心に耳を傾けた。

自主福祉運動の実践交流を図り、地域における活動活性化を目指すとともに、政治・経済・社会・労働・福祉問題などの動向や情報を今後の活動に生かすことを目的に行われており、富士・富士宮両市と県労働者福祉協議会が後援。

冒頭あいさつに立った西山会長は、依然厳しい社会情勢に触れながら、「今日のセミナーを富士地域に生きる私たちに何ができるかを考えるきっかけにしてほしい。労福協として



富士山での清掃活動などについて話す野口さん

「(不法投棄で)樹海から見る富士山は最低」

多くの人が現状知るべき

そうした中で、清掃活動をはじめた動機を「エベレストは非常にきれいな山だが、実際にベースキャンプを訪れるとごみが非常に多い。現地の人たちに『日本人はエベレストをマウンツフジにするのか』と言われショックを受けた」と振り返りながら、「過去を取り戻すことはできないが、再び美しくする」と話している。こうして思いから清掃を始めた」と説明した。

その後、富士山の樹海で目にした光景について、「注射器などの医療廃棄物やタイヤ、ドラム缶など、極めて性質の悪いごみが富士山に捨てられており、ここまで不法投棄があるのかと愕然(がくぜん)とした。このとき

また、自身が所属するNPOの清掃活動についても紹介し、「これまでの活動の成果で、5合目から上はごみを拾いながら登山する人も増え、ごみを捨てにくい環境ができてきた。年間三十数万人が富士山に登っているが、1人1個ごみを拾えば三十数万のごみが減る」と説明。今後は「5合目から下、特に樹海の不法投棄を何とかしたいといけない。そのためには、静岡・山梨両県の行政や各種団体、地域の皆さんが富士山を守るという意識で継続して活動を続けていかななくてはならない」と訴えた。

も、スローガン「連帯共同で安心の社会」を目指していきたい」と呼びかけた。

講話した野口さんは、自身の活動について、「さまざまな活動をする中、自分が何屋か分からなくなっている」とユーモアを交えながら、「なぜさまざまな活動を行っているかと問われれば、登山家として世界中のいろいろな場所に行き、自分の目で実際に現場を知ることから。そこから何と

かしたいという動機が生まれる、活動につながっている」と紹介。